

2024年度

大学生と集落の協働による地域活性化事業

福島大学×二本松市北戸沢保全会

活動報告書

<目次>

1. はじめにー活動の目的と概要	
(1) 地区の概要と課題	1
(2) 今年度の活動内容	2
2. 地域資源の“これまで”と“これから”～戸沢あるもの探しツアー	2
3. 北戸沢の“これまで”と“これから”～地域に生きるひとびとの生活史を通して	
(1) 調査の概要	6
(2) 里山資源の“これまで”と“これから”	8
(3) 北戸沢「記憶の場所」マップづくり	11
4. おわりに	15

2025年2月

福島大学岩崎ゼミ

1. はじめにー活動の目的と概要

(1) 地区の概要と課題

福島大学岩崎ゼミでは、3年目の伴走支援活動として、福島県二本松市の北戸沢保全会の方々と共に活動を行ってきた。

戸沢地区は、戸沢一区から戸沢十二区、戸沢羽山、戸沢下田、戸沢川向、戸沢十二区東で構成されている。1955年に旧戸沢村は近隣の木幡村、針道村、太田村とともに東和村として合併された。

2025（令和7）年2月1日時点での戸沢地区の現住人口は1,023人である。図1で示したように人口は減少傾向にあり過疎化が進行している。

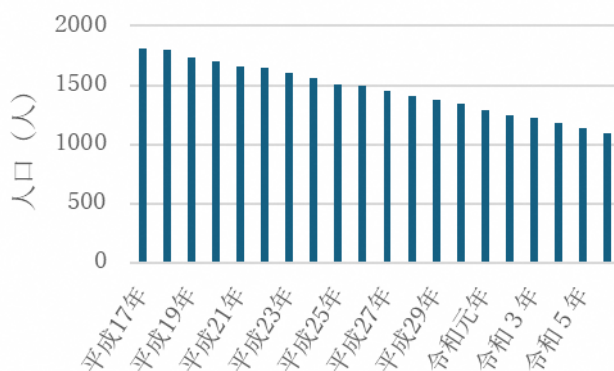


図1 戸沢地区人口の推移（二本松市ホームページより）

戸沢地区での大学生事業は今年で3年目となった。1年目には保全会活動への参加や地域住民との交流を行い、2年目には里山資源を活かしたフットパスの整備、「戸沢さんぽみちマップ」の作成を行った。3年目となる今年度はこういった活動をしていくかについて地域住民の方々と意見交換をした結果、住民の方々には「地区から外に出ている若い子どもたちが自らこの地域に戻ってきたいと感じる地域にしたい」といった思いが強くあることを知った。

そこで、今年度の伴走支援事業では、戸沢の歴史や保全会活動の振り返りを通して、「集落史～戸沢地区の“これまで”と“これから”」をまとめることで、今後の地区のあり方を地区の方々とともに考えることを目的とした。地区がこれまで歩んできた歴史をまとめておくことは、戸沢という地域の遺伝子を将来世代に引き継ぎ、これから先の地区の未来像を描く上で大切な財産になる。自分たちの住んでいる地域の歴史を個人の生活史をもとに構築し、歴史を皆で共有するなかから、「役に立つ過去を生かし、懐かしい未来を描く」こ

とに取り組んでいくことにした。

加えて、私たち学生目線から見た戸沢地区の魅力も伝えるために、「戸沢あるもの探しツアー」も行った。併せて、住民の方へのインタビューを行った後に、住民の方々が印象に残っている資源についてまとめる「記憶の場所マップ」の作成を行った。

（２）今年度の活動内容

今年度行った活動は以下の通りである。

- ①現地打ち合わせ（５月２６日、６月９日、１０月２６日）
- ②Instagramでの発信開始（５月～）
- ③保全会の草刈り活動ボランティア（６月３０日）
- ④『東和町史』を読んで、戸沢の歴史・歴史資源を把握（７月～）
- ⑤戸沢地区のあるもの探しツアー（９月１７日）、地域資源マップづくり
- ⑥白鬚神社の例大祭・竣工式神事への参加（１０月１３日）
- ⑦住民の方へのインタビュー調査（１１月１６日、１２月１日）、芋煮交流会
⇒保全会のメンバーを中心に、計１７名に対しインタビュー。自分史と戸沢地区の未来像について
- ⑧「記憶の場所」のマップづくり、インタビュー調査の文字起こし、『集落史』の編集活動（１２月～）
- ⑨福島県知事表敬訪問（２０２５年２月７日）、福島県報告会（２月８日）
- ⑩現地報告会（２月２４日）

２．地域資源の“これまで”と“これから”～戸沢あるもの探しツアー

ここでは、２０２４年９月１７日に実施した戸沢あるもの探しツアー（ななくさ農園、白鬚神社、田向の湯、旧北戸沢小学校跡、愛蔵寺、最勝寺、香野姫神社）で訪れた場所を取り上げる。このツアーは、学生目線から見た戸沢の誇るべき財産について調べ、地域住民や他出した若者世代に戸沢の良さを再認識してもらうことを目的に行った。

○ななくさ農園

保全会事務局長の S さんが経営している農園。S さんは東京から東和に I ターンされ、有機農業を行っている。ホップ作りからクラフトビールの醸造も手掛けている。田舎暮らしの体験や有機農業を学びたい人向けに滞在の受け入れも行っており、戸沢と他地域から訪れた方々の交流の拠点となっている。



ななくさ農園



保全会で飼育するヤギ

○白鬚神社

1380 年に九州熊本 of 菊池神社から勧請されたと伝わる由緒ある神社。
菊池氏は九州肥後国の名門・菊池氏の一族で、南北朝時代に南朝・後亀山天皇の命で奥州に入り、小手森（現在の福島県二本松市針道）一帯に領地を得た。天正 13 年（1585 年）、家督を継いだばかりの伊達政宗が、小手森城のある東安達地方（現在の福島県二本松市阿武隈川東岸）を来襲し、菊池顕綱をはじめとする城兵だけでなく城に籠もった女・子どもなど約 800 人を討ち取ったという言い伝えがある（『東和町史』）。

白鬚神社の祭礼は 10 年ほど前までは祭りで山車が区内を練り歩いていたこともあり、地区で住民たちが交流できる場であった。

2024 年には住民から寄付金を集め階段の整備が行われた。



改修された階段

○田向の湯

古くに生活用として整備された冷泉。弱アルカリ性で美容に効果があり、お風呂のお湯に混ぜて利用されていたこともある。



田向の湯の看板

水をくむことができる井戸

○旧北戸沢小学校跡

課外授業として地域に根差した作物づくりなども行われていた。

○愛蔵寺

真言宗豊山派 松尾山明星院愛蔵寺。本山は、奈良県桜井市桜井市長谷寺の末寺。

麓山中腹に寺領 12 町歩を有し、12 の坊を数える岩代の国唯一の真言密教寺院で信仰を集めていた。しかし、永禄年間に野焼きの火が余って僧坊伽藍を消失。

その後、天正元年（1573 年）に開山し、黒少内地内に建立されるも、護摩厳修中の火が余り堂塔ことごとく消失。宝暦 5 年（1755 年）に愛蔵寺が建立。

明治以後に、寺子屋・上戸沢校・戸沢村役場も置かれ、文化の中心的役割を果たしてきた。農繁期には託児施設としての役割もあった（『東和町史』）。

寺内にある桜は愛蔵寺の護摩ザクラと名がつけられ、町指定の天然記念物に指定されている。名前の由来は火災時に護摩札が空中に飛来し、桜の枝に留まったことから。以前は桜まつりも行われていて、全国から人が集まっていた。



寺内にある鉄棒 昔は子どもたちが遊んでいた。

○最勝寺

寺内にある高野槇は最勝寺のコウヤマキ（高野槇）と呼ばれ、東和町指定の天然記念物に指定されている。菊池の祖則隆の霊がこの木の下に宿った口伝えがある（『東和町史』）。



最勝寺

○香野姫神社

養蚕の神様として香野姫が祀られており、東和において桑の葉、養蚕が盛んであったことを示している。

境内には香野姫神社の夫婦桜があり町指定文化財に指定されている。ひとつの桜樹にヒガンザクラとシダレザクラの２種類を見ることができたが、近年枝枯れによってシダレザクラを見ることができなくなった（『東和町史』）。

3. 北戸沢の“これまで”と“これから”～地域に生きるひとびとの生活史を通して

(1) 調査の概要

①聞き取りの内容

保全会のメンバーを中心に 17 名の方に生活史の聞き取りを行った。聞き取りに当たっては、下記の調査項目を設定した。学生 2～3 名がグループになり、お一人当たり 60 分～90 分程度、集会所や個人のご自宅でお話を伺った。聞き取り後は文字起こしを行い、本人に内容を確認してもらったうえで、「集落史」として記録に残すこととした。

<基礎項目>

○ご本人のプロフィール（性別、年齢、職業、農業をされている場合は作目と面積規模）

○現在の居住地、居住年数、家族構成

○他出している子どもがいる場合の居住地、他出のいきさつ、戸沢への訪問頻度

○（U・I ターンの方へ）戸沢に戻った（入った）いきさつ

<子どもの頃・若い頃の思い出>

○お父さん、お母さんはどんな方でしたか？

○子どもの頃はどんな遊びをしていましたか？

○子どもの頃の通学や家の手伝いなどについて思い出はありますか？

○子どもの頃は、どんなものを食べていましたか、その頃の食べ物について何か思い出はありますか？

○学校時代や進学にまつわる思い出

○青年団活動や地域のサークル活動などの思い出

○（戦争体験者の方へ）戦争中、戦後の思い出（戦災、疎開など）

<地域の暮らし等の変化について>

○子ども時代や若い頃の、農業・林業生産、その他の生業（仕事、出稼ぎなど）のようすと変化

○現在では使われなくなった里山資源について、以前は、どのように農と暮らしで活用されていましたか

○災害やその復旧についての思い出

○年中行事・お祭りなどの思い出、変化 今はもうない年中行事など

<現在～未来>

- 現在の趣味や楽しみ、仕事のやりがい、家庭外での役割など
- 保全会に参加したいきさつ、活動してよかったこと、保全会活動の今後の課題
- 地区の好きなところはどんなところですか（風景、人柄など自由に）
- これからの地区の課題、よりよい地区にしていくために必要なこと
- 政府や自治体の政策についての意見、注文
- 大学生事業への感想、大学生への今後の期待
- 地区を担う次世代に伝えたいこと、次世代に残していきたいこと

②調査から得られたこと

今回の聞き取りで、お一人お一人の人生の歴史に加え、地域の暮らしや生業、里山資源の活用の変化、地域への愛着や思いについて、住民自身の語りを通して知ることができたのは大きな成果だった。インタビューを実施する以前は、『東和町史』を利用した文献調査や、実際に戸沢を見て回る「あるもの探しツアー」など、どちらかと言えば視覚的な調査がメインだった。しかし、この聞き取り調査を実施したことにより、自身で調べ、見て学んだ場所やものが住民の話に出てきたことで、その場所やものに対する知識を深めることができた。また、聞き取り調査にて話していただいたストーリーや思い出を結び付けて場所やものを認識することができて、深い学びを得られた機会だった。

調査では、昔の暮らしや遊びについて多くの話を聞くことができた。その中で印象的だったのは、子ども時代の遊び方や過ごし方が今と大きく異なっていたことだ。現代のようにスマートフォンやゲームがない時代、子どもたちは自然の中で遊びを生み出しながら過ごしていた。川で魚を捕まえたり、山や木に登ったり、地域の行事を通して交流の場を持っていたという話が特に興味深かった。

また、遊びだけでなく、日常の暮らしのスタイルも今とは異なっていた。例えば、近所付き合いが今よりも密接で、子どもは地域全体で見守られていたという話があった。一方で、昔は物が少なく、不便なことも多かったため、その環境の中で工夫しながら生活していた様子が伝わってきた。

こうした話を聞くことで、昔と今の暮らしの違いを知るだけでなく、地域に根付いた文化や価値観がどう変化してきたかを考えるきっかけにもなった。何より、昔の遊びや暮らしの話をするときの皆さんの表情がとても楽しそうで、生き生きとしていたのが印象的だった。ただの昔話ではなく、その人の人生そのものを聞かせてもらっている感覚があった。

今回の調査を通して、私たちがいかにこの地域を外側から見てきたのかを思い知ると同時に、「集落史」を作成する意義を本当の意味で理解できた。今回インタビューした方々の活動は公的記録に残るものではなく、本人や回りの人々の記憶だけに残るものだ。しか

し、ご自身が感じていたように人々の記憶は絶対ではなく、いずれ薄れていってしまうもので、その時にどんな思いで活動していたのか、その背景にはどんな思い出があったのかを次世代まで届けることはできなくなってしまう。だからこそ、個人の記憶を束ねた「集落史」を作ることで、公的記録には残せないものまで次世代に引き継ぐことができるのだと思う。

なお、インタビュー時はメモや相槌に精一杯で気が付けなかったが、調査が終わった後に文字起こししたときに、方言独特の温かさや気遣いの言葉が多かった。住民同士の会話を聞いても、住民の方々がここの地域から離れない理由が込められていると感じた。

聞き取り調査後の交流会では、インタビューとは違い他愛もない会話が盛り上がった。学生をネタにして笑って楽しそうにしている際に住民の方が何気なく呟いた「こういうのが生きがい」という言葉を聞いた。その瞬間に今回の取り組みに意味があった、頑張りが報われたことを感じた。また、私たちが考える地域活性化のカタチとは違った、「住民の生きがい」のようなものを地域の方々は求めていることに気付かされた。

（２）里山資源の“これまで”と“これから”

１．里山資源の活用に関する聞き取りから

本稿では、中山間地域で課題となっている里山資源の活用について、戸沢地区では今までどのように活用されてきたか、そこから考えられる今後の活用方法などについて論じていきたい。

聞き取り調査では、「現在では使われなくなった里山資源について、以前は、どのように農と暮らしで利活用されていましたか」という設問を設定して、聞き取りを行った。

表１は、インタビューの方それぞれが今までどのように里山資源を活用してきたか、また、現在・今後の利用についての言葉をまとめたものである。

表１ 里山資源の活用についての聞き取り結果

番号	里山資源の活用について
①	・使われなくなった里山資源の活用については、自身も考えていた。子どもたちと小麦を蒔くなどしたかった。 ・里山が荒れ放題になるとほかの動物が住み着くようになってしまう。そういうことをなくすために、里山の草刈りなどをして害獣を寄せ付けない仕組みが必要。

	・自身含め保全会のメンバーも高齢化が進んでいるため、率先して協力できる人が少なくなっている。
②	・ホップの栽培などに使いたい。
③	・昔は里山で草刈りをしていた。刈った草を肥やしにしていた。 ・以前は山で採れたタケノコや山ぶどうを食べていた。
④	・山に入って、柿、さつまいも、ぶどうを取ったりしていた。
⑤	・小学校時代には、山で焼いた炭を背負って車のところまで運び出していた。 ・焚き木にするため里山で薪を作っていた。
⑥	・以前は地域資源である木や竹を使う企業が盛んで多くの雇用を生んでいた。 ・今は木を切る人もいなければ、お金にもならないため荒れ放題となっている。山にある竹も、以前は稲刈り後の稲を干すはざかけに利用されていたが、今ではそれもなくなってしまった。
⑦	・子ども時代は里山資源をフルに活用して遊んでいた。ふきや栗を拾ったり、イナゴを捕まえたり。 ・「里山の活用」が地域活性化のポイント。田んぼを小学生とか都会の人向けに貸し出してお米作り体験など。
⑧	・歩いたり馬に乗ったりして草刈りに行っていた。 ・学校帰りは山道を歩いて、クマイチゴなどの木の実を食べたりと毎日のように道草をしていた。 ・雑木林を切って炭にして、その炭を養蚕の暖房に使っていた。伐採後の空いた場所には杉を植えていて、里山の資源が十分に使われていた。 ・現在では、何年か前的大雪で植えていた杉が折れてしまった上に、イノシシも出没するようになってしまい、怖くて山に入ることもできない状態。
⑨	・個人の山があり、薪を割ったり、堆肥を作って田んぼに入れたり、作った炭を売ったりしていた。 ・植林や薪・炭づくりはかつて皆がしていたことであり、里山は暮らしになくてはならない存在だった。
⑩	・里山の山菜を採って食べることもあり、学校で各自家から持ち寄った山菜をまとめて売って学校の資金にしていたこともあった。 ・震災前まではふきやたけのこなどを採って食べていたが、放射線の影響により今は食べていない。

2. 調査結果の分析と考察

ここでは、上記の表からわかる里山資源の“これまで”と“これから”について、検討を加えたい。

里山資源の“これまで”としては、以下の点が挙げられた。

- ・里山で草刈りをして、刈った草を肥やしにしていた。
- ・山で採れたタケノコや山ぶどうを食べていた。
- ・山に入って、柿、さつまいも、ぶどうを取ったりしていた。
- ・小学校時代には、山で焼いた炭を背負って車のところまで運び出していた。
- ・焚き木にするため里山で薪を作っていた。
- ・木や竹を使う企業が盛んで多くの雇用を生んでいた。
- ・竹は、稲刈り後の稲を干すはざかけに利用されていた。
- ・子ども時代はふきや栗を拾ったり、イナゴを捕まえたり遊んでいた。
- ・歩いたり馬に乗ったりして草刈りに行っていた。
- ・学校帰りは山道を歩いて、クマイチゴなどの木の実を食べたりと道草をしていた。
- ・雑木林を切って炭にして、その炭を養蚕の暖房に使っていた。伐採後の空いた場所には杉を植えていた。
- ・薪を割ったり、堆肥を作って田んぼに入れたり、作った炭を売ったりしていた。
- ・植林や薪・炭づくりはかつて皆がしていたことであり、里山は暮らしになくてはならない存在だった。
- ・里山の山菜を採って食べることもあり、学校で各自家から持ち寄った山菜をまとめて売って学校の資金にしていたこともあった。

次に、里山資源の“これから”については、以下のような意見が挙げられた。

- ・ホップの栽培などに使いたい。
- ・子どもたちを巻き込んで小麦を蒔くなど。
- ・里山の草刈りなどをして害獣を寄せ付けない仕組みが必要。
- ・「里山の活用」が地域活性化のポイント。田んぼを小学生とか都会の人向けに貸し出してお米作り体験など。

かつて里山は薪や炭等重要なエネルギー源供給の場であった。草を刈って肥やしにしたり、はざかけに利用したり、農業生産においても重要な役割を果たしていた。また、竹や木材を使う企業もあり、雇用の場を生んでいた。とくに子どもたちにとっては道草をしたり、木の実や果物を食べたりする遊び場となっていた。

現状としては、少子高齢化が進んだ戸沢地区では里山資源の手入れが難しく、お金にかえる方法も思い浮かばないため、資源を手に残している状態であるが、今後については、ホップなど新規作物の栽培、子どもたちや都会の人との協働などの意見が挙げられた。

今回の調査結果をふまえ、今後は里山資源と結びつけたイベント開催を行い、地域に人

を呼びたいと考えた。具体的には、里山資源を活用した遊び場を作り、小学生を呼んで屋外活動の拠点づくりをすることや、田植え体験等を大学生と保全会、活動に興味を持ってくれた企業とともに実現したい。

また、小さな6次産業化の取り組みも考えられる。6次産業化とは、農業者、つまり1次産業が、農畜産物の生産だけでなく、2次産業である製造加工や3次産業サービス業・販売にも取り組むことで、生産物の価値をさらに高め、農業所得の向上を目指す取り組みのことだ。「6次産業化」という言葉の6は、農業本来の1次産業だけでなく、2次産業、3次産業を取り組むことから、1次産業の1×2次産業の2×3次産業の3のかけ算の6を意味している。

では、どのようにして戸沢地区で産業の6次化を導入しながら里山資源の活用をするか。まず、戸沢地区の里山で桑の葉やホップの生産をする。そして自分だけのオリジナルビールや、自分でブレンドするお茶を作るといった名目で、都市や近郊から人を集め、月に一度のペースで農業を体験してもらう年間を通した簡単なツアーのようなものをつくる。そうすることで、安定した交流人口を確保することができるし、里山の継続的な管理、運営が可能になるのではないだろうか。

(3) 北戸沢「記憶の場所」マップづくり

1.はじめに

聞き取り調査から次の世代へ継承したい地域の特性や事例、物語を明らかにするために、戸沢地区において住民が思い出のある場所を「記憶の場所」として整理し、それにまつわるエピソードを紹介する。

2.分析結果

聞き取り調査から得られた戸沢の「記憶の場所」について、言及された数が多かった場所から順にまとめる。

2-①白鬚神社

白鬚神社の境内は枝垂れ桜や緑豊かな木々に囲まれている。この神社は主に戸沢の祭りが開催される場所であり、この祭りについての思い出が特に多く語られた。

10年ほど前までの白鬚神社の祭りでは、山車が地域を練り歩き、戸沢の6,7,8区を回っていたことが伝えられている。この祭りの規模は大きく、仮装、紙芝居、演技会など祭りの特色が多くあった。隣町から映画館が出演するなど、映画や芝居も祭りの一部として行われ、地区の祭礼の舞台として、住民たちが交流する場となっていた。

祭りの時期には出稼ぎから帰ってきて参加していた人が多かったこと、交代で祭りの総代を務めていたこと、「山車で地域を回る際、花輪をつくって池において歩いた」等、白髭神社の祭りに関しての思い出は特に鮮明だった。当時の戸沢での文化的な生活に密着していたことが想像できる。

青年の集いとして結集された「若連」は、3日間に及ぶ秋祭りの前日から神社に集まり、お酒を飲んだり会食をしたりして盛り上がったという。泊まり込みでステージを作るなどの準備をして、地域の文化的な行事を支えていた。祭りでは青年団の活動が活発で、地域全体が参加する形で行われていた。

祭りの規模は近年縮小し、現在では山車を使用した練り歩きは行われなくなっている。しかし、氏子の集まりなど、祭りの精神を引き継ぐ活動は続いており、今でも神社での伝統的な行事や交流が行われている。また、「あばれ山車」という針道地区の祭りでは、山車をぶつけ合うという伝統的な祭りが行われている。

②北戸沢小学校

二本松市立北戸沢小学校は2010(平成22)年に隣接地域の学校と合併して東和小学校となり、閉校している。

生徒たちは徒歩で通学しており、小学校へは遠い距離を歩くことが一般的だった。北戸沢小学校に通っていた方々は1.5~2kmの道のりを歩いて通学しており、長い方は4km程度、自分が作ったわらぞうりを履いて登校した話もあった。雪の日には地域の人々が協力して雪かきをしてくれたというエピソードもあった。荷物はふろしきで包んで、安全ピンで止めて通学していたという当時ならではの工夫も場所から連想される思い出として引き出された。

学校生活では様々な活動が行われていた。家庭クラブでは、着物やスーツを縫って記念写真を撮ったり、料理を習ったりすることがあったこと、小学校では課外授業として地域の作物づくりが行われ、地元の農業が教育活動に取り入れられていたことが明らかになった。さらに、地元の学校行事として区対抗のソフトボールやバレーボール大会も行われ、地域の絆を深める活動が盛んに行われていたことが示された。小学校のグラウンドで盆踊りをしていたという話もあり、戸沢の祭り文化と関係があることが伺えた。

学校で支給される牛乳について面白いお話があった。学校給食では牛乳のみが出されるため、母親にお弁当を作ってもらっていたという思い出を聞くことが出来た。小学校では、戦後脱脂粉乳が支給されていた時代があり、高校ではその牛乳も支給されなくなったそう。

学校生活の一部として、里山でふきを取って学校に持って行くという活動もあり、地域資源を活用する体験の場が提供されていたという。

小学校のグラウンドでは盆踊りなどの地域行事も行われ、学校は地域の文化活動の中心的な場所として機能していた。また、学校には足洗い場があり、雨の日にはそこで足を洗うことができたという思い出もあり、地域の実用的な施設が生活の一部となっていた。

多くの人に証言されていた地元の学校は、地域住民にとって思い出深い場所であったことが分かる。特に通学時に使用していた道や、学校で行われていた地域のイベントなどが記憶に残っており、学校が地域社会の中心的な役割を果たしていたことが示唆された。

2-③川、水路

川で鯉を釣る、水路を堰き止めて泳ぐなど、戸沢地区の住民たちは、川や水路を利用して日常生活の一部として活用していたことが語られた。また台風で川が氾濫することもしばしばあったそうで、こうした水害も戸沢の災害の特徴と考えられる。これらの情報から、以前の戸沢では水や魚など自然との関わりが深いことが伺える。

2-④戸沢集会所

現戸沢7区集会所の場所に前身の集会所があった。住民が集まって交流を行っていた場所として、地域の絆を深める重要な役割を果たしていたことが語られた。囲炉裏や五徳があったという詳細な説明が生活感を掻き立てていた。

集会所では地域の人々が顔を合わせる機会を提供しており、その存在が住民の生活に大きな影響を与えていたと考えられる。

2-⑤文化センター

文化センターでは、竹、藁細工、手芸などの作品を展示して市販よりも安く販売していた。クラブで作ったものなどを売ってみるとすぐに完売してしまうらしい。芸能発表会もある。過去だけでなく現在・未来にも繋がる場所であり、活用方法を検討できる場所でもあるだろう。

2-⑥その他

個人の思い出深い場所として、毎朝景色を見ることが好きだった白猪森、朝晩しかない不便なバスが来るバス停が挙げられた。これらは戸沢に住んでいるからこそその思い出であり、日常で普段意識しないような地域独自の特性を捉えている。また、桑の葉、養蚕、た

ばこの葉の生産が盛んだったという当時の産業の様子だけでなく、若者たちがみんなであちこちに行って盆踊りを踊っていた文化的な様子や、凍った田んぼの上をすべってスケートの様なことをしていたという当時の遊びについても語られた。

3.調査結果から明らかになったこと

戸沢地区の「記憶の場所」として、白鬚神社、文化センター、白猪森など様々な場所が挙げられた。これらの場所は、住民にとって単なる物理的な空間にとどまらず、地域の文化や歴史、コミュニティの絆を形成する重要な場所であったことが確認できる。例えば、白鬚神社の祭りや文化センターでのクラフト販売、旧学校の通学風景など、各地域資源はその時代の記憶と強く結びついている。

以前は山車や仮装、芝居などによって多くの人の手が加わって盛大に行われていた祭りも、近年では規模が縮小したことがわかる。こうした祭りに参加することを通じて、住民同士が結びつき、地域全体の活気を支えていたことが感じ取れる。

地元の小学校や文化センターは、地域での学びや活動が住民の生活の場であったことが浮かび上がった。特に地元の学校は、通学方法や給食の内容以外にも、個人として結びつく記憶は多岐にわたる。閉校されてしまっても、学校は地域社会の一部として、地域の歴史や文化を反映する重要な存在である。閉校した学校に関連する情報や記憶を保存することによって、地域社会に与えた影響やコミュニティ内での文化の変遷を理解することができると考えられる。

これらの場所は、地域の歴史や住民の生活に深く根ざしており、地域社会のアイデンティティを形作る大切な要素であることが明らかになった。また、過去の祭りや学校行事、集会所での活動などが、住民間の絆を深め、地域の誇りを育む場となっていたことがわかった。しかし、これらの場所や活動は、時代の変化や人口減少により、次第に薄れてしまい、現在ではその記憶を保持する人々が減少している点は地域活性化に向けた課題となっている。

地域資源は単なる物理的な場所ではなく、住民の心に刻まれた思い出や伝承によって成り立っている。その資源が持っていた歴史的背景や物語を知る人がいなくなることは、それらの「記憶」が持っていた地域のアイデンティティが弱まってしまい、地域の「誇りの空洞化」につながりかねない。

地域住民が抱く「誇り」とは、その地域での生活や歴史、文化、伝統に対する深い愛情や尊敬を意味し、これが強く根付いていると地域社会が一体感を持ち、住民同士のつながりが深まることが期待される。例えば地域行事や伝統的な祭り、地域特有の風景や建物に対する誇りはそれに当たる。

「記憶の場所」のマップづくりを通じて、地域の歴史や物語を再評価することは、地域

のアイデンティティを再構築し、住民間のつながりを強化するために非常に重要であることを学んだ。地域の記憶の保存と伝承は、その地域で何がどのように出来たか、どんな理由や原因があってできなかったのかなど、地域の特性や当時の人脈などを知る上で必要不可欠であり、こうした情報は今後の地域活動における取り組みの指針や選択肢の幅を広げることに有用である。直接的に地域の活性化や再生に繋がるものではないとしても、若者や次世代がその土地の過去を身近に感じることは、その地域で行動を起こすための一歩を踏み出しやすくする一つの要素になる可能性がある。「誇りの空洞化」を避けるために地域住民個人の記憶を収集して書き記すことも、地域社会の未来に対する責任とつながりを築くための大きな役割を担っていると考えられる。

4. おわりに

今年度は、地域の歴史を個人の生活史をもとに構築することで、「ここに生まれてよかった」「これからも、この地を守り育んでいきたい」という思いを地域で共有するための取り組みを進めることができた。

聞き取り調査では、地域の現状だけではなく、地域の過去の生活の様子を住民ご自身の口から捉えられたことが大きかった。歴史を振り返り、記憶として残す取り組みの重要性を再認識できた。地域を形作ってきたものは今までそこで生活をしていた住民であり、話し手と聞き手の両者の対話の中で地域の在り方を認識することによって、地域のアイデンティティがより確立されていくことを感じた。また、地域住民の営んできた生活を守り伝えていくためには、今回行ったように文字に起こし、形のない記憶を記録として目に見える形で残すことが重要であるということがわかった。

また、聞き取りを通して個々人の過去の思い出や、現在または未来に対する願いや夢を生き生きと話してくれる保全会の方々の姿を見て、自分たちが行った活動は戸沢の人々が楽しめる活動にすることができたのだと実感し、大きなやりがいを感じることができた。「大学生が来るようになってよかった」という言葉を聞いた際、フィールドワークで何度も足を運んできたことの意義を実感し、これからも地域に携わっていきたいと思った。今回の調査結果を『集落史』として読み物にまとめ、今後は住民の方や他出した子どもたちとともに共有する活動をしていきたい。

若い方や女性、子どもたちなどと交流する中で、例えば地域の働き手世代に、他出せず

地域に残った理由を聞いたり、子どもたちに将来地域に残るつもりかどうかを聞いたりして、若者が地域に残りたいと思えるような取り組みにつなげたい。

さらに、来年度以降は学生側から積極的にコミュニケーションを取りに行くことが重要であると感じた。住民の方からも是非交流を取ってほしいという声は上がっているため、学生が主体的な行動をとることが重要であると考えた。また、戸沢地区の活動をもっと多くの人に知ってもらうために情報周知活動に力を入れて取り組んでいきたいと思った。

SNS アカウントを X などにも作り、より多くの人に知ってもらえるようにしたい。学校外の人だけでなく学校内の人にも知ってもらえるように、大学の HP にイベントや活動を掲載するなどの活動を行っていききたいと思う。そして、インタビュー調査でも家同士のつながりがもっと増えてほしいという要望があったので、それに関するイベントや交流会を考えていきたい。

最後に、今年度の多くの有意義な活動を通して、私たちが得た成果は「地域活性化＝常に人で賑わい、お店が多く、町が栄えている状態」とは限らないと気づいたことである。この戸沢地区に初めて入って顔合わせをするまでは、地域活性化とは交流人口を増やすためにイベントを開催したり、企業を誘致したりと、地域を人で賑わせる必要があると考えていた。しかし、地域の住民の方々や保全会の方々と交流していくうちに、上記のような活性化を求めているのではないことに気付かされた。会長が「住民のみんなが笑ってたんなら、それでいいんだ」とおっしゃったときは驚いたと同時に感銘を受けた。

そして、これから求められる地域活性化とは、従来のように観光振興や特産品開発、移住・定住促進などの一般的な策に地域を当てはめるものではなく、住民の方々がどんな地域を望むかに耳を傾け、その形を共に構想する、住民のための地域づくりなのではないかということを見出した。この経験を活かして今後は、地域の方々が「どんなカタチの地域活性化を目指しているのか」ということに焦点を当て、その地域ならではの地域活性化のプロセスを当事者として模索し、住民の方々とベクトルを合わせながら活動に携わっていききたい。

2024年度大学生と集落の協働による地域活性化事業

福島大学×二本松市北戸沢保全会活動報告書

編集：福島大学岩崎ゼミ（行政政策学類1年ゼミ）

発行日：2025年2月28日

連絡先：〒960-1296 福島市金谷川1番地

福島大学行政政策学類 岩崎由美子研究室